

分科会 3

アンチスティグマとリカバリー ～相模原事件を考える～

松本俊彦（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部部長）
野辺さやか（NHK制作局第1制作センター 文化・福祉番組部）
島本禎子（杉並家族会）
宇田川健（認定NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ）
高橋清久（認定NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ アドバイザー）

今年は、2016年に起こった相模原障害者殺傷事件を取り上げました。

自分の言葉で話をしようということで、当事者の立場から認定NPO法人コンボの宇田川健、精神科医の立場から国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部の松本俊彦さん、マスコミの立場からNHK制作局第1制作センター 文化・福祉番組部の野辺さやかさん、家族の立場から杉並家族会の島本禎子さんが発表しました。

宇田川は、相模原事件のあと、自分が受けた影響や、偏見や誤解がどうなったか、精神保健法の改正案について発表しました。

松本俊彦さんからは、薬物依存を担当する専門家としての経験から、今後精神科医と当事者の関係はどう変わってくるのか語っていただきました。

特にポイントを3つに絞り、①措置入院の問題、特に入院の時の非自発性と退院する時の問題について。②加害者が障害者施設に勤務していたことと支援者の孤立について。③加害者の偏った障害者観について、特に排除の不安と優生思想について、自分たちも無関係かどうかについて、お話いただきました。後半部分はこの事件をきっかけに医療はどう変わって欲しいか、当事者と医療者の関係性はどうかというお話をいただきました。

野辺さやかさんからは、相模原事件についての番組づくりから、精神科について取材する過程で、どんな風に自分の中で精神科医療や精神科当事者についてももの見方が変わっていったのかということをお話いただきました。自分の中にも見えないことに対する恐れ、知らないことに対する恐れからスティグマが生まれると言及されていました。また強制入院の際の精神科では、コミュニケーション不足があるのではという指摘がありました。現在では精神科医療について、丁寧であること、自分ごとであること、見えることが大切なのではと提案がありました。

また、杉並家族会の**島本禎子さん**は、初めて相模原事件の報道に触れた時の経験や、ご自分が運営されている作業所での経験、嬉しかったことは高校生の模擬国会で「差別社会をなくすように国が全力で取り組むことを提言する」という提言があったこと、当事者、家族は未来に続く人のため自らの経験を生かすという貴重な役割を持っているというお話をいただきました。

その後、会場との意見交換になり活発な意見交換がなされました。

司会は認定NPO法人コンボの宇田川健と、杉並家族会の島本禎子さんといういつものアンチスティグマとリカバリーのチームで行い、最後に認定NPO法人コンボアドバイザーの高橋清久さんに、ポイントは3つあるということで、熱い議論を熱くまとめていただきました。

《宇田川健（認定NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ）》